

## 2017年 IWL 参加報告記

今井 亮一

コペンハーゲン 2017

2017年7月3日～7月26日

於：コペンハーゲン大学

『れにくさ』では最早お馴染みとなった、the Institute for World Literature（以下 IWL）の参加報告記である。第7回となった2017年はコペンハーゲン大学で開催され、7月3日から26日までの4週間、セミナーのある日だけで数えれば全16日間の、刺激に満ちた時間であった（参考までにスケジュール表を付しておく）。「国際学会などへの参加記録」という、本稿が紀要内で置かれるべき文脈を鑑みれば、少なからず学術性を意識した硬質な文体で記すべきかもしれない。が、そうした報告はすでに歴代の『れにくさ』に十分揃っているし、「大変だったけれど楽しかった」というのが素朴な感想なので、敢えて一人称も「僕」として、ややくだけた文章で綴りたいと思う。

繰り返し示唆してきた通り、過去の『れにくさ』にすでに有意義な情報が多数掲載されている。直近では2016年度の『れにくさ』7号に所収されている阿部幸夫君の参加報告記が、出願手続きの内容から始まる実践的かつ充実した内容で、今後 IWL への参加を検討している方は必読だ（僕もたいへん参考にさせていただきました。この場を借りて阿部君にお礼を）。諸般の事情により突貫工事で出願手続きをした僕に、この点で報告できることは何もない。ただし一つあらためて特記しておきたいのは、出願時点でサンプルとして英語論文の提出が必要だということである。事前に準備しておいた方が慌てない。ちなみに留学などにありがちな、TOEFL などのスコア提出は求められなかった。

話を IWL 本体へ移そう。メインのイベントとなるのが、前半と後半で8日ずつ、計2つ

SCHEDULE				
Mon	Tues	Wed	Thurs	Fri
7/3	7/4	7/5	7/6	7/7
<b>Week 1</b>				
9:00-11:00	Registration	10:00-11:00 Library Tour (Room 1)		
11:00-1:00	Campus tour	Colloquia (1-4)	Library Tour (Groups 2 & 3)	Colloquia (7-12)
1:00-2:00	Lunch break	Lunch break	Lunch break	Lunch break
2:00-4:00	Seminars	Seminars	Seminars	Seminars
5:00-7:00 7:00	Beitl Denmark Opening Lecture		Niklas Lecture Group Photo	Niklas Dining and Beitl Cruise
7:30-10:00	Reception/ Opening Dinner			
7/10	7/11	7/12	7/13	7/14
<b>Week 2</b>				
9:00-11:00				
11:00-1:00	Colloquia (1-4)		Colloquia (7-12)	1800 - Bay Egbe Krossberg Castle
1:00-2:00	Lunch break	Lunch break	Lunch break	Lunch break
2:00-4:00	Seminars	Seminars	Seminars	Seminars
5:00-7:00	Panel on Publishing		Sara Danner Lecture	
	7/17	7/18	7/19	7/20
<b>Week 3</b>				
11:00-1:00		Colloquia (1-4)		Colloquia (7-12)
1:00-2:00	Lunch break	Lunch break	Lunch break	Lunch break
2:00-4:00	Seminars	Seminars	Seminars	Seminars
5:00-7:00	Music Talk		Collaborative project Panel	
	7/24	7/25	7/26	
<b>Week 4</b>				
11:00-1:00	Colloquia (1-4)	Colloquia (7-12)		
1:00-2:00	Lunch break	Lunch break	Lunch break	Lunch break
2:00-4:00	Seminars	Seminars	Seminars	Seminars
5:00-7:00	Music Talk		4:30-5:30 Closing Panel	
7:00-10:00		Closing Dinner		

の講座を受けるセミナーだ。2017年度はそれぞれ6つのセミナーが開講され、出願時に第1から第6まで希望を出しておいた。幸いいずれも第1希望が通り、前半はStefan Helgesson教授の「Literary Form and the Global South」、後半はMads Rosendahl Thomsen教授の「Between Nations: Migrant Writing and the Cultural Meeting in the Text」を受講した。僕が研究対象としている中上健次には「フォークナー、繁茂する南」という講演があり、その付記では「南」をキーワードとして世界文学の作家たち（トニ・モリスン、ガルシア＝マルケス、サルマン・ラシュディなど）を中上自身と並べて概観してみせている。こうした意識と、近年よく耳にするthe Global Southを重ねて考えられないか、という問題意識で前半のセミナーを選択した。もう一方の後半のセミナーを選んだ理由はごく単純で、希望提出時に参照できたリーディングリストが面白そうだったから、である。文学と接する上での僕の「基準」は、結局はやはり面白いかどうかなのだと思う。

Helgesson教授のセミナーでは、アフリカの英語文学、あるいは英語に訳されたアフリカや南米の文学、そしてそれらの作品に関連する論文や批評を読み、ディスカッションが行われた。語学力の不足もさることながら、こうした地域の作家・作品を専門的に研究している受講生が大半を占めており、専門的内容を含むディスカッションにはついていくのが精一杯だったというのが本音であるが、あまり馴染みのない地域の作品や最新の研究動向に触れたのは刺激的だったし、レベルの高い議論で大変勉強になった。そもそもの関心であった中上との関連性——さらに言えば日本文学との関連性——についても、the Global Southという概念の作業仮説としての柔軟性や危険性を認識できたことで、様々な有益な示唆を得た。

後半のMads教授のセミナーは、サイドの「故国喪失についての省察」など批評的な文章も読んだが、むしろアレクサンダー・ヘモンやロベルト・ボラーニョなど、セミナー名が示唆するような具体的な文学作品を多く読んだ。前半のディスカッションを経てだいぶ英語に慣れていたということもあるが、後半のセミナーでは予備知識のある作家・批評家の文章も多かったので、ディスカッションにも多少参加しやすかった。議論に参加するためには、語学力はもちろん、事前の基礎的な知識が必須だと思う。自身の研究を深めて足元を固めておくのと同時に、「World Literature 世界文学」と冠された場である以上、パスカル・カザノヴァ、フランコ・モレッティ、エミリー・アプター、そしてもちろん、IWLの扇の要と呼ぶべきデイヴィッド・ダムロッシュなどの著作を——できればそこで言及されている作品や論考の基本情報を含めて——きちんと理解しておいた方が、IWL全体を通じてより多くの知識を吸収できるだろう。特に関係があるわけではない両セミナーに敢えて共通点を見出すとすれば、いずれもポストコロニアル、反欧米中心主義、国民国家の相対化といった意識はほとんど無条件の前提であり、そこから何を言えるか、という論調だったと思う。その際、日本はどのような位置づけになるのか——例えば、日本文学は欧米の文学ほど世界的に読まれているわけではないものの、「Literary Form and the Global South」で言えば日本は「南」なのか——を改めて強く自覚させられることもしばしばだった。

セミナー本体は1日2時間という短くも思える時間設定だが、いずれのセミナーも1回の授業に対して課題となる英文が70頁ほどあるので、予習はなかなか大変だった。僕はほ



レクチャーの様子。

とんどキャンパス内と言ってよいような立地の寮で過ごしていたので、特に前半はほぼ毎朝開館と同時に図書館に通って読んでいたが、図書館内で IWL の参加者を見かけるのはもちろん、昼食に大学のカフェテリアに行く道すがらでも、あるいはちょっとした空き時間でも、課題を読んでいる受講者を多く目にした。課題は、

データでは数ヶ月前に手に入るのので、邦訳の確認をしたり、早くから読んでおくのでもいいかもしれない（印刷したものは現地でもらった）。ただ私見を述べておくと、実際のディスカッションはもちろん英語なので、邦訳だけを読んでいくのは有効でない。また、やはり読んだ直後の読後感に優るものはないので、セミナーと並行しつつ（も）読んだ方が理解が深まるだろう。振り返ってみれば、共有された限られた時間で苦勞をとにもすることも、貴重な経験であったのだ。

IWL ではセミナーの他に、レクチャー、パネル、コロキウムもある。初め 2 つは全員が一堂に会す形の大規模なもので、厳密に言えば参加は義務でない。いずれも週 1 回程度、質疑応答含め約 2 時間。レクチャーでは例えば IWL 開講当日に、David Damrosch 教授のオープニング・レクチャー「世界文学とは何でないか？」があった。世界文学研究に寄せられたいくつかの批判に対し、ダムロッシュ教授らしく、具体的な作品を例に挙げつつユーモラスかつ鮮やかに切り返していた。その他にも、セミナーも開講する講師が自身の最近の研究について講演したり、あるいはスウェーデン・アカデミーにも所属する Sara Danius 教授による、「ノーベル文学賞の獲り方」というゲスト・レクチャーがあったりと、趣向に富んでいた。この「ノーベル文学賞」レクチャーは、僕としてはやや独善的に感じられた講義本体よりも、聴衆が鋭く問いかけた質疑応答のほうが面白く、受講者のレベルの高さを改めて感じた。パネルも講師陣を中心に行われ、例えば（アメリカで）学術書を出版しキャリアを積むにはどうすればいいか、といったテーマでディスカッションがなされたりした。誰しもに直接的に役に立つ、というわけではないかもしれないが、海外のアカデミズムの潮流ないし構造を知ろううえで興味深い内容だった。

一方のコロキウムは、2016 年より参加が義務づけられている。ここでは 6 つほどのテーマから 1 つを選択する形で、10 人程度のグループに分けられる。週 1 回 2 時間、全 4 回の開催で、全員が自身の研究に関して発表を行う。例えば僕の場合、「World Literature & Translation」というテーマを選択し、コロキウム 9 というグループに割り当てられ、「Kenji Nakagami's Intralingual Translation」という題で 20 分程の発表を行った。英語での発表は初



オープニングディナー。

めてだったが、コロキアム9のリーダーであった Loreto Paola 准教授のあたためたかい進行に助けられた。今更ながら、IWLには様々な背景をもつ多岐にわたる受講者が集まっている。コロキアム9を例に挙げても、トルコの人文学やアラビア文学、韓国語訳された北朝鮮文学、アメリカでの人文学の社会貢献を考えるプロジェクトやデンマーク

での世界文学研究の動向など、様々な話題に接することができた。なお、個人的な話をすると、事前準備の段階ではコロキアムの発表原稿を作るのが一番大変だったので、今後 IWL に参加する方は計画的に作業することをおすすめしたい。

いわゆる「勉強」面については以上だが、初日と最終日にはディナー（立食パーティー）があって、交流を深める機会が設けられていた。オープニングディナー時、日本文学を研究しているという受講者に声をかけてもらったのをきっかけに、日本人2名（現代文芸論研究室修士2年の山田絵里奈さんと僕）を含む6人の“Japanese Speaking Society”も結成されたのだった。

また、第1週目の金曜日にはコペンハーゲン市内をめぐる運河クルーズ、2週目の金曜日には『ハムレット』の舞台であるクロンボー城への小旅行と、楽しいイベントもスケジュールに組み込まれていた（参加は任意で、後者は追加の費用負担〔交通費と入場料〕が必要）。この他にも、コペンハーゲン市内に教会などの観光名所もあれば博物館や現代アートの展示スペースがあったり、あるいは小一時間ほど電車で郊外に移動すれば、世界一美しいとも評されるレイジアナ美術館や様々な世界遺産があったりと見どころも多く、受講者同士で「〇〇がよかった。行った方がいい」という情報交換をしては予定を立て、楽しい時間を過ごしたものである。

こうした面は、もしかしたら IWL というよ



クロンボー城。

り都市の魅力の問題なのかもしれない。しかし、2018年のIWLが東京大学で開かれると聞いていたので、例えば運河クルーズに相当するものは「はとバス」なのかな……と、つい考えてしまった（※運河クルーズは一般的なガイドブックにも必ずや掲載されている「観光」なので、多分そこまで突飛な比較ではない）。国際的な研究会を開催する以上、ホストの責任はとても重い。IWLも「勉強」面が一級というだけでは物足りない。こうしたイベントも丁寧に計画しなければならないのだろう。思い返せば、2017年のIWLはハウジング関係でいくつかトラブルも続いたが、ハーヴァード大学とコペンハーゲン大学の現地スタッフの尽力で解決された。その恩恵を受けて有意義な時間を過ごした以上、東京で開催される折には少しでも恩返しができる、と思っている。もちろんそのためには、まずは自分の研究を深めなければならないのだが。

最後まで最も重要なこととして、様々な面で支援していただいた沼野充義先生に感謝を記して本稿を閉じたい。ありがとうございました。